

# 口銀谷地区

(兵庫県朝来市)

- 計 画 期 間 平成17年～21年
- 面 積 65.5ha
- 交付対象事業費 785百万円
- 市人口 34,336人 (地区内人口 1,840人)

**ポイント** 生野銀山町の歴史文化遺産の再生活用を軸とした、住民参加による懐かしい未来のまちづくり。

**地区概要** 口銀谷地区(くちがなやちく)は生野銀山の玄関口として、銀山の発展とともに街なみが形成されたところで、銀山町の風情が色濃く残る伝統様式建物などが分布している。生野の歴史的、風土の特徴を生かしたうおいとやすらぎのある街なみ景観の創出を住民と一体となって取り組んでいる。

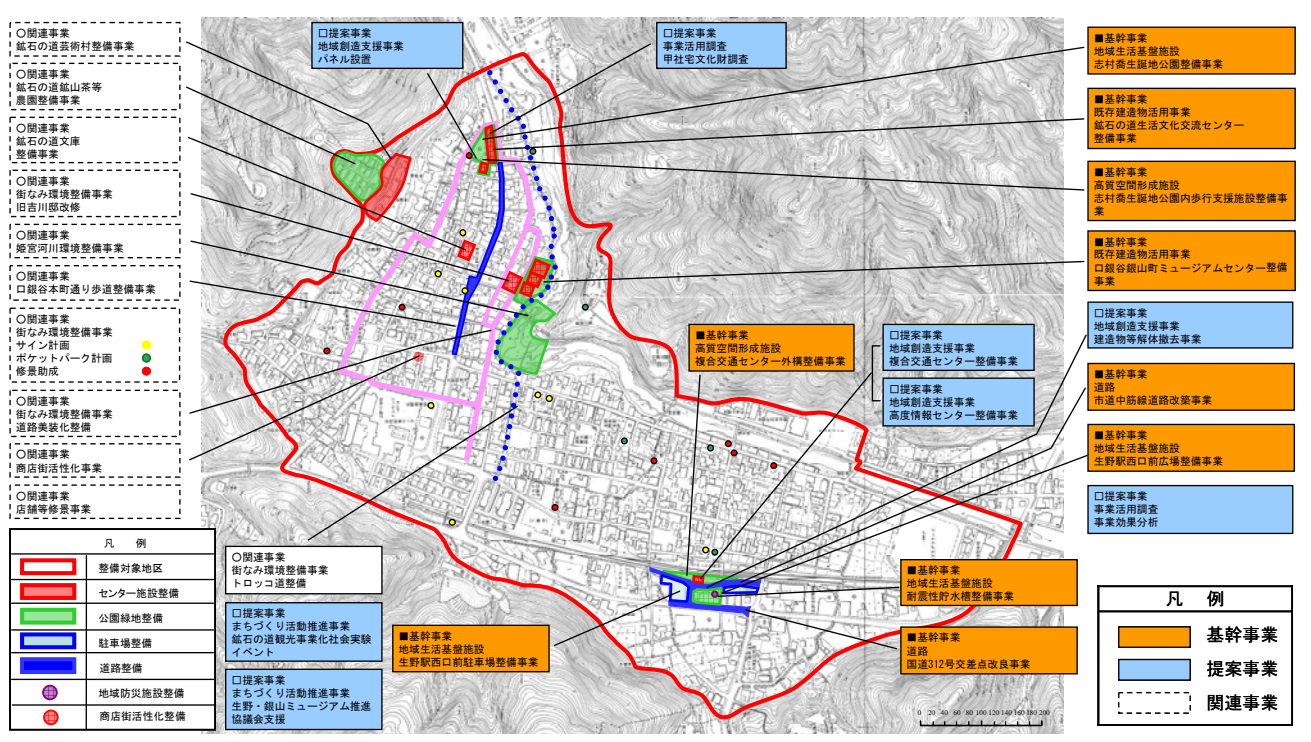
**目 標** 歴史的文化遗产を生かした観光交流によるにぎわいの再生。但馬の玄関口としての交通結節点機能の整備。住民参加による観光交流プログラムの充実。

**指 標** まちの賑わいづくりの再生と交通結節点機能の整備と連携した住民参加のもとでの地域再生を図る取り組みが数多く展開される相乗効果を目標とした。

地域来訪者数	159千人/年 (H14)	→	200千人/年 (H21)
駅の乗降客数	528人/日 (H14)	→	600人/日 (H21)
住民のまちづくりへの参加度	120人/年 (H15)	→	300人/年 (H21)

**事業内容** 基幹事業(665百万円) → 道路(幅員 10.25m~18.0m、延長 244m)、道路(幅員 12.0m~14.75m、延長 185m)、広場(2カ所、2,037㎡)、駐車場(1カ所、1,385㎡、33台)、防火水槽(1基、40㎡)、歩行支援施設(1式)、鉱石の道生活文化交流センター(5棟、540㎡)、口銀谷銀山町ミュージアムセンター(3棟、526㎡)

提案事業(120百万円) → 複合交通センター・高度情報センター(1棟、146㎡)、甲社宅文化財調査、事業効果分析、鉱石の道観光事業化社会実験イベント、生野・銀山ミュージアム推進協議会



## 地区の現況と課題

口銀谷地区は、生野町の中心市街地であるが、鉱山閉山以降の商業活動は衰退の方向であり、鉱山町の歴史を今に伝える町並みや建造物、懐かしい生活文化や当時の風情等が現存しており、鉱山町として栄えた生野町独自の地域資源を生かした町の活力や賑わいの再生が求められている。

## 提案事業の特徴

### 複合交通センター整備

これまで駅の東側からのみ改札可能であった駅舎について、駅の西側にセンターを新築する事により、西口改札、トイレ、及び、鉄道・バス・タクシー等の待合室の新設により、地域来訪者及び地域住民の利便性を向上する。

### 高度情報センター整備

地域の玄関口として、来訪者を適切に誘導する観光情報案内施設。複合交通センターと一体の建物とする事により、来訪者が生野駅に降り立った時点から地区の「懐かしい」空間をイメージする事が出来る。

### 鉱山の道観光事業化社会実験イベント

鉱山町の歴史を今に伝える町並みや建造物、懐かしい生活文化や当時の風情が現存しており、鉱山町として栄えた生野町独自の地域資源を生かした、地域で取り組む交流イベント（銀谷まつり）を実施している。

## 計画策定プロセス

### ワークショップの開催

生野町総合計画を住民参加によるワークショップ方式で策定し、平成9年に住民と行政職員で構成する地域づくり生野塾を発足して、参画と協働のまちづくりを進めてきた。平成13年度に、口銀谷地区を対象地区とした生野町中心市街地等活性化基本計画を策定し、平成14年度からは生野銀山町の歴史文化や懐かしい生活風習等の復活をめざした「銀谷まつり」を開催している。平成15年度に生野町TMO基本構想を策定し、平成16年には、国土交通省主催の地域づくり表彰を受賞している。まちづくり交付金事業においては、口銀谷地域整備計画検討会を平成17年に立ち上げ、地域住民が主体となって事業を進めるにあたって、具体的な整備内容や施設の管理運営体制についての検討会を開催した。全体会において「口銀谷地域整備構想」（平成18年10月）を策定し、その後、甲社宅整備計画検討会、駅西整備計画検討会、井筒屋周辺整備計画検討会の各部会に分かれて検討を行った。



▲ 口銀谷下小路線風景



▲ 銀谷まつり風景



▲ シンポジウム開催



▲ ワークショップの様子

## 朝来市長のコメント

「生野銀山」として全国的に知られた朝来市生野町口銀谷地区（くちがなやちく）は、銀山の発展とともに街なみが形成されたところで、鉱山町の歴史を今に伝える街並みや建造物、懐かしい生活文化や当時の風情が現存している。昭和48年の鉱山閉山以降は、人口の減少が進み、商業活動は衰退してきており、かつての鉱山町として栄えた口銀谷地区独自の地域資源を活かした町の活力や賑わいの再生が求められている。

そんな中、生野地域では、総合計画を住民参加によるワークショップ方式で策定し、平成9年に住民と行政職員で構成する地域づくり生野塾を発足して、参画と協働のまちづくりを進めてきた。平成13年度に、口銀谷地区を対象地区とした生野町中心市街地等活性化基本計画を策定し、平成14年からは生野銀山町の歴史文化や懐かしい生活風習等の復活をめざした「銀谷（かなや）まつり」を開催している。平成15年度に生野町TMO基本構想を策定し、平成16年度には、国土交通省主催の地域づくり表彰を受賞している。

まちづくり交付金事業においても、平成17年に口銀谷地域整備計画検討会を立ち上げ、住民参加のもとで「生野銀山町の歴史文化遺産の再生活用を軸とした懐かしい未来のまちづくり」をテーマとして計画検討してきた。平成17年4月の合併による新市誕生以降も、これまで培ってきたまちづくりのノウハウを継承し、積極的に事業展開している。

## 口銀谷地域整備計画検討会の会員のコメント

当検討会においては、地域の現状と課題及び過去の住民参加のもとで積み重ねてきた取り組みを再確認し、課題を克服するため、整備方針をまとめた。

1点目は、観光交流による賑わいの街並みの再生を図る。具体的には、生野銀山の風情を色濃く残す街並みや鉱山史跡を保全するとともに、観光拠点を集中的に整備し、観光ルートモデル指定を行う。観光拠点は、単に観光するだけでなく、子供から大人まで近代産業遺産の学習が出来る機能も付加したものとする。

2点目として、朝来市の南の玄関口にふさわしい交通結節点機能強化を図る。生野町の京阪神からの主なアクセス道路は、国道312号であり、鉄道によるアクセスはJR生野駅となっている。これらの輸送経路から生野の中心市街地までの案内誘導施設がなく、鉱山町としての観光資源を生かしきれていない。そこで、観光交流拠点のシンボリックなポータルを整備し、そこで観光情報などを発信する事により、中心市街地へ観光客等の誘導を図っていく。また、鉄道交通と自動車交通との連携がないことから、駅前広場的機能を整備し、相互補完を行う事によりJR利用者の利便性を高めるとともに、自動車・自転車・歩行者等の安全性・利便性を高めていく。

3点目として、住民参加型のまちづくりをすすめる。現在活動を行っている団体の活動を援助し、住民参加のもとで行われている都市との交流事業やイベント事業の拡充を図っていく。また、産業遺産等への観光客の受け入れ体制を充実させ、おもてなしのサービス提供を行う。

この整備方針は、「検討会だより」として地域に広報をおこなった。このように住民が主体となって検討会を行い、検討結果を地域住民へ広報するという、情報共有の基で行われるまちづくりを今後も引き続き継続していく事が重要だと考えている。

## 地域住民のコメント

「まちづくり」とは、主に人が暮らす場所の良さを残しつつ、今以上に暮らしやすくするために、地域資源の再生、活用、暮らしの場所としてのまちのレベルアップをしていく事と考えている。地域資源を発掘し、観光振興というものにつなげていく取り組みは、今や普遍的とも言えるまちづくりの手法となりつつある。「まちづくり」という視点からの観光振興の取り組みは、そこで暮らす人々だけでは維持が困難となっている暮らしの場を来訪者による利用、消費等の活動という応援を得ることで、維持、向上させようという考えが基本にある。

したがって、外から人が訪れることで、今まで顧みられなかった地域の魅力が再認識され、そこが地域への愛着を生むことも重要であるが、来訪者にとっての魅力の増進が、同時にそこで暮らす人々にとっての魅力向上となる事も重要である。

来訪者の魅力アップに向けた取り組みは、地域の外からの目でものやまちを見て発想していくことが有効である。しかしながら、暮らす人々にとっても魅力アップは、当然のことながら、地元特に住民の内からの目、発想が不可欠である。

今回の検討会では、まずここで暮らす住民の目で検討され、住民にとっても有益なものか否かが判断され、修正、追加を経て、住民の基本的な合意に至るプロセスが行われたものと思う。ここに一つの成果があると思うが、このことは平成8年から始まった、住民と行政の協働による様々な取り組みが継続的に行われてきた、数年にわたる実績の現れであると思う。